
不完全なヴァンパイアと魔導書の少女

すちーるうーる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不完全なヴァンパイアと魔導書の少女

【Nコード】

N4476X

【作者名】

すちーるうーる

【あらすじ】

魔法が存在し魔物、竜、天使、悪魔、精霊などももれなく存在する世界『アスタナシア』

この世界では魔物から人々を守る《狩人》を育成する学園がある王都にあるアルテミス学園もその1つだ

そしてその学園の【忘却の図書館】で主人公が出会ったのは『鴉の翼』という魔導書だった

プロローグ：少年の眩き

こんな夢を見た――

自分の姿をした自分ではない自分が大量の屍が積み上げられた山の上で恍惚の表情で世界を見下ろす

そんな夢だ

自分の姿をした自分ではない自分は宝石のような紅い眼をしていて元は綺麗だったであろう銀色の髪を赤い血で染めていた

そして自分の姿をした自分ではない自分はその紅い眼をこっちに向けてこう言うのだ

「私を受け入れろ」と

「……………ハア……………」

少年は寝ていたベッドからむくりと起き上がると幸せが逃げていくようなため息を吐いた

少年の名はクーファス・ツヴァルト

アルテミス学園1年7組所属の15歳だ

肩にかかるくらいに伸ばしたどこか神秘的な雰囲気漂わせる髪は白く、整った顔の目の色は右目が黒で左目は紅い

そんな女性の10人中10人がイケメンと言っただろう整った顔を持つ少年はどこか苦しそうな顔でこう呟いた

「あー、血が飲みたい」

アルテミス学園、輩出の森にて

アルテミス学園―

生徒数3000人ほどの《狩人》を育成する学園だ

《狩人》とは魔物の討伐を生業とする者達のことだ

ここ南大陸の王都ウルスの少し離れた場所の森

『輩出の森』の中央に建てられたアルテミス学園は《狩人》輩出の名門と言える由緒ある学園である

「あー面倒くさい」

『輩出の森』の入り口に覇気のない白髪の少年が立っていた

少年はグレーがベースのブレザー、チエックの入ったストラックスを身に纏っていた

少年―クーファス・ツヴァルトは妖しさを放つ紅い瞳をアルテミス学園がある方角に向け

「マジ面倒くさい」と言つて『輩出の森』に入つていった

クーファスは歩くのが面倒くさいと言つたんじゃない、ましてや彼が今日からこのアルテミス学園1年7組に転入することを言つたんじゃない

クーファスの向かう方角の1?先に何か大きな力が目覚めようとしていることに対して彼は「面倒くさい」と呟いたのである整った顔の目の色は右目が黒で左目は紅い

そんな女性の10人中10人がイケメンと言うだろう整った顔を持つ少年はどこか苦しそうな顔でこう呟いた

「あー、血が飲みたい」アルテミス学園――

生徒数3000人ほどの《狩人》を育成する学園だ

《狩人》とは魔物の討伐を生業とする者達のことだ

ここ南大陸の王都ウルスの少し離れた場所の森

『輩出の森』の中央に建てられたアルテミス学園は《狩人》輩出の名門と言える由緒ある学園である

「あー面倒くさい」

『輩出の森』の入り口に覇気のない白髪の少年が立っていた

少年はグレーがベースのブレザー、チェックの入ったスラックスを身に纏っていた

少年――クーファス・ツヴァルトは妖しさを放つ紅い瞳をアルテミス学園がある方角に向け

「マジ面倒くさい」と言つて『輩出の森』に入つていった

クーファスは歩くのが面倒くさいと言つたんじゃない、ましてや彼が今日からこのアルテミス学園1年7組に転入することを言つたんじゃない

クーファスの向かう方角の1？先に何か大きな力が目覚めようとしていることに対して彼は「面倒くさい」と呟いたのである

―魔導書の覚醒め―

「やばいな、確実に禁書だし使用危険度は余裕でS越えてんな」

クーフェスはため息を漏らしながら本日三回目になる「面倒くさい」を呟いた

アルテミス学園領『輩出の森』の入り口から1？先に強大な力を感じてから彼はどう対処するか悩んでいた

「早く学園行かんとあいつに怒られるし、かといって禁書を野放しするのも後々面倒だしなあ」

禁書というのは閲覧禁止と指定されている魔導書である

魔導書には7つの属性がある火、水、風、雷、土、光、闇だ

光と闇を除いた5つの魔導書が一般的に知られている魔導書だ

しかし光や闇の魔導書は別格で光の魔導書は神殿や協会本部など限られた場所にしか置かれない

闇の魔導書に至っては一般的に知られてすらいない

闇の魔導書は禁書に指定され厳重に管理されている

しかしごく稀に『覚醒める』ことがある

それが今まさにクーフェスの前で起きている事態なのだ

つまりアルテミス学園で管理されている闇の魔導書が覚醒めようとしているという軽く災害のような事態が起きている

過去に闇の魔導書の『覚醒』によって都市1つが壊滅したという記録がある壊滅の理由は魔導書の内容に左右される

つまり魔導書に記された内容が、目の前の相手を殺すくだったし
よう

すると魔導書の力に侵された人々は目の前にいるのが全く知らない相手でも最愛の人でも容赦なく殺すだろう

ここまで言えば解るだろう闇の魔導書の恐ろしさを

しかしクーフエスは乗り気ではない

なぜなら自分1人ではこの事件を解決するのは難しいと分かっているからだしかし一か八かでもやらないといけない状況なのも分かっている

「しゃーないな…まあ今の俺が魔導書の封印が出来る確率は5割弱だろうがやらなきゃいけないよなあ」

とクーフエスがぶつぶつと呟いていると魔導書を封印している建物に辿り着いた

その建物の名前は――

「『忘却の図書館』――ね、成程封印には持ってこいだな」

そう呟く少年は災害に立ち向かうには場違いな楽しそうな表情を浮かべていた

『忘却の図書館』の扉

「さうで、いっちょ気張りますかね」

クーフアスは『忘却の図書館』の扉に手をかけた

「ふむふむ、一定量の魔力を流し込まないと開かないカラクリか……」

扉を開ける仕組みが解ったクーフアスはせうのという掛け声と同時に――

「うりゃああああああああああああ！！」

適当に流し込んだ

その魔力量は一級魔導師10人に匹敵する量だった

一級魔導師の総魔力量はだいたい500ほどつまりクーフアスは5000ほどの魔力を適当にしかも軽く流し込んだのである

ガシャン！

「おっ！開いた開いたっつとっ」

桁外れという規格外の魔力を流し込んだはずなのに全く疲労が見えない

普通だったら急性魔力枯渇症になるだろう

そんなことは気にもせずバンバン流し込んだのであるこの少年は

「~~~~~♪♪」

扉を開けたクーファスは鼻唄を陽気に口ずさみながら中に入っていた

やはり少年の顔には恐怖の色が見えずどちらかと言うとサンタを待ちわびている子供のようだ

「さてさて、と」

クーファスは『忘却の図書館』に入ると中を見渡した

「やっぱり禁書の位置はまるわかりだな」

といいながら一番奥の部屋に入ろうとした――

「グウウアアアアアアアアア」

「わーお」

周囲に重力をかけるかのような咆哮が響いた

「マンティコア…ランクはA A > ダブルエー<か…」

体躯はライオン、顔は人面、尻尾はサソリの尾の化け物

Aランクの《狩人》が5人がかりで討伐する魔物がクーファスの前に立ち塞がった

マンティコアとの戦い

前回までのあらすじ！

災害級の闇の魔導書が今覚醒めようとしていた！魔導書を封印しようとかうクーファス！しかしクーファスの前にマンティコアが現れた！

マンティコアはランクA Aの魔物でランクAの《狩人》が5人がかりで討伐する強敵なのだ
以上前回のあらすじでした♪

「グウアアアアアア！」

「うつさい！黙れ！人がせつかく現実逃避してんのによぉ！」

今クーファスの前には全長3mほどのマンティコアがいる

「番犬ならぬ番マンティコアってわけか…あいつも面倒くさいもん置きやがって…だいたいマンティコアのマンティってなんだよ…パ
ンティの親戚？やだ興奮してきた」

まだ現実逃避をしているクーファスに構わずマンティコアはその巨大な右足を振りかざしてきた

「ガアアアアアア！」

「おっと！危ないな！」

クーファスはマンティコアの右足を紙一重でかわしさらに後ろに跳んで距離をとった

「よし、真面目にやるかな…術式展開！火の7＞楽炎く！」

クーファスは右手を前にかざし術式という魔方陣を展開し火の7＞楽炎くを発動した

属性には強さが10段階あり1段階上がるごとに威力が上がっていくクーファスが使用した火の7は火属性の7段階目の魔法の1つである

クーファスが発動した＞楽炎くはマンティコアに直撃し、＞楽炎くはマンティコアに絡み付いた

「熱いだろ？＞楽炎くは相手を縛る炎の鎖だからな。もうお前は動けないぜ？魔導書封印したら解除してやるから大人しく待って……

！」

クーファスの言葉は最後まで紡がれなかった

なぜならマンティコアのサソリのような尾がクーファスの腹部を貫通したからだ

（くそ！尾は最初に切断するべきだったな……！）

焼けるような激痛

耐えきれずクーファスは倒れた

不完全なヴァンパイア

腹部に突き刺さる鋭いサソリの尾
焼けるような激痛

「くっそ……！」

激痛に顔を歪めながらクーファスは倒れた

術者がかけた魔法は術者が死ねば解ける
しかしマンティコアを縛り付ける「楽炎」は解けていないそれはす
なわち――

「あ……やっと治った」

マンティコアは驚愕していた
普通なら確実に死んでいる
もし助かったとしても尾に塗られた毒が回復魔法を拒絶し、回復出
来ずに出血多量で死んでいるはずだ

なのに目の前の少年は生きている

「はっはー、どうして俺が生きてるか不思議でならないんだろ？教
えてやるよ。それは俺がヴァンパイアだからだ」

正確にはクーファスはヴァンパイアではない
ヴァンパイアと人間のハーフのダンピールだ

しかしヴァンパイアである父の力を色濃く受け継いだため圧倒的な再生力と魔力を持っている
元々ダンピールはヴァンパイアほど力も強くないし特殊能力も持たない

その代わりにヴァンパイアの持つ弱点が失くなるそしてダンピールは死ぬとヴァンパイアになれる、いやなってしまう

しかし圧倒的な再生力と魔力のせいで長命で死なないクーファスはヴァンパイアになれない

さながら『不完全なヴァンパイア』だ

「さてさて、お仕置きの時間だな」

ニタアと意地の悪い笑みをマンティコアに向けゆつくりと近付く

身の危険を感じたマンティコアは尾をクーファスに突き出した
しかし――

「不意打ちだから効くってお前が一番解ってるだろ！水の6＞水鎌
く！」

刹那、『忘却の図書館』にマンティコアの断末魔が響いた

「ふう… ってやべっ！時間食っちゃった！」

クーファスは慌てながら禁書の保管庫の扉に手をかけた

ダレカノササヤキ

—ここは何処だろう？

暗い空間、何もない空間、光が差し込まない空間

目を閉じているのか

闇の中なのか分からない

ただ1つ分かるのは…

—寂しい…

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■

クーファスは扉に手をかけた

ゴウッ！

「あつ…やべえこれもう手遅れだわ…」

視覚できる濃密な闇の魔力

その量は一般人なら昏睡するレベルだ

「やっぱマンティコアに時間かけすぎたなあ……どうすっかなあ……
……んー、あまり気乗りしないけど一大事だしなあ……やるしかないか
……」

クーファスは両手を魔導書にかざし――

「術式展開光の10>聖光<」

を唱えた

この魔法は光の最高クラスの魔法で天使にしか使えない浄化の魔法だ
なぜクーファスが使えるのかと言うと……いやこの話はまた今度にし
よう

闇の魔導書に思い切り浄化魔法>聖光<を繰り出す

するとどうだろう視覚出来きるほどの濃密な魔力が薄れていく

「……………くっ!」

クーファスは額に脂汗を浮かべ苦しそうな表情をしている

徐々に闇は薄れていきついには闇の魔導書からは魔力が確認出来な
くなった

「ハア、ハア、ハア……」

クーファスは膝を付きながら安堵の表情を浮かべる

しかし、突然魔導書から先程とは比べ物にならない程の魔力が溢れ出した

「おいおい…マジかよ…」

闇の魔力は魔導書を軸に回転し、圧縮し出した

「くそっ！こんな濃密な闇の魔力、大天使でも即死だぞ！」

圧縮を続ける闇の魔力

そしてそれがビー玉サイズにまで小さくなった所でまぶしい光に包まれたそれは闇の魔力から放出されたものとは思えないほど暖かく心地よい光だった

少女

状況を整理しよう

俺は闇の魔導書の封印に来た

しかし門番代わりのマンティコア相手に時間をかけすぎた
そしたら闇の魔導書は覚醒寸前

> 聖光くを使つてなんとか封印成功！

かと思つたら魔力が圧縮を始め光と共に弾けた
光が収まってから目を開けると――

「なんで魔導書が無くなつて女の子が寝てんだよ……」

俺は大変困惑している

この状況はどう対処すればいいんだ？

……とりあえずあの子を起こしてどつという事が聞くしかないよな…

俺は仰向けで気持ち良さそうに寝ている女の子に近付いた

…あれ？なんかこの表現俺が変態に思われね？

女の子は14歳ぐらいで綺麗な黒髪をしている

顔は整っていて綺麗な人形のような

身長は150未満かな？

ゴクッ

いや違うよ！？今のゴクッは断じてやましいことを考えていたわけ

じゃないよ!?

と、とりあえずこの子を起こさなきゃ!

「おゝい? 君大丈夫?」

失礼だと思っただけどほつぺたを軽く叩いて話しかけた
つかほつぺた柔けゝ

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■

―何か暖かい光を感じる

この何もない空間に初めて訪れた何か
それはとても暖かく、心地いい光
全てを包み込み安らぎを与えてくれる光

―気持ち良い…

「おゝ……じょ……?」

何だろう? 声が聞こえる誰の声だろう?

「おゝい? 君大丈夫?」

私を呼んでいるの?

ぺちぺち

ん、暖かい…これは手?

目を開けてみるとそこには白い髪少年がいた

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■

「おっ! 起きたね」

黒髪の少女は寝ぼけ眼で俺を見ている

「あつ、俺はクーファス君の名前は？」

「な……まえ？」

「うん、名前」

「私は……【鴉の翼】」

「からすの……つばさ……！？」

（【鴉の翼】って確か闇の魔導書しかもSランクの閲覧禁止厳重保管対象の最悪の災厄と呼ばれる原書じゃないかっ！）

「もしかして君は…魔導書？」

「ヤー、闇の魔導書【鴉の翼】です」

— 涙 — (前書き)

どーも今まで寡黙を貫いてきた作者すちーるうーるです？

なぜここまで寡黙を貫いてきたかと言うと……………

ぶっっちゃめんどかつたんですよ(笑)

まあ、ここまで来たらもうカキコしちゃうと親友のUさんに言われましてね

まあなんやかんやで出会い編のクライマックスですね

楽な姿勢で気分転換程度に見ていただけると作者的には嬉しいですよ

あと感想などはいつでも受け付けておりますゆえどしどしお願い致します

— 涙 —

魔導書の中には無理矢理本にされた人間がいる

力が強すぎて殺す事が出来ずだから本にして封印した人間
それを原書と呼ぶ

「本当に君は…魔導書？」

「や、私は【鴉の翼】300年前に魔導書されました」

300年—

300年と的確に時間が分かるのならこの少女は意識があつたとい
う事だ

永い時間、本の中に閉じ込められこんな暗くて寒い所に置かれて少
女はどう思っただろう？

「……………なぜ抱き締めるのですか？」

気付いた時には目の前の少女を抱き締めていた

「なぜ…貴方は泣いているのですか？」

「寂しかったろ？」

「……………」

無言は肯定

「こんな暗くて寒い場所に300年—誰にも知られず、独りぼつち
だったんだよな？寂しかったんだよな？」

「……………ヤ」

「だったらさ、そんな寂しい目は止めてくれ」
少年は涙を止めない

「誰もお前を知らなくても俺はお前を知っている」
少年はさらに力強く抱き締める

「皆がお前を否定しても俺はお前を肯定する」
少年は少女を認める

少年の頬を伝い落ちた涙は少女の頬を伝う

「暖かい…」

これは少年の優しさなんだと少女は理解する

そして少年の暖かさに触れた少女は――

「うつ、うつう あああ あああん！」

絶叫ともとれる大きな声でただ泣いた

少年はそれを無言で受け止める
時々頭を愛しそくに撫でながら

最初は同情だったのかもしれない
でもそんなことはどうでもいい
今はこの子を包み込んであげたい

この子を笑わせてあげたい

だからクーファスはこう告げる

「俺と『契約』しないか？」

— 涙 — (後書き)

至らぬ文章で申し訳ない…

誤字脱字などございましたらご指摘の程申し上げます

『契約——結ぶ絆——（前書き）』

ども

出合い編が終了です

ゆる〜く見てくださると作者的に嬉しいです

『契約』——結ぶ絆——

「俺と『契約』しないか？」

俺は目の前でやっと落ち着いてきた少女にそう問いかけた

「……『契約』ですか？」

『契約』とは契約したい対象の血と自分の血を混ぜ合わせ自分の身体に目印として塗りつけることをいう

しかし『契約』には二種類ある

1つは『同等契約』

文字通り契約対象と自分を同等の関係つまりパートナーとしての契約を結ぶ儀式だ
そしてもう1つは――

「貴方は私を利用したいだけですか？」

少女は悲しそうな表情でそう言った

だいたいお察しだと思うがもう1つは『主従契約』これも文字通りだししかしこの場合は契約対象に自分の血を飲ませることで自分の魔力を対象の体内に侵入させ無理矢理命令をきかせるというサディスト御用達の契約方法だ

もちろん俺は前者の『同等契約』を言っている

「違う。俺が言っているのは『同等契約』だよ」

「……………」

少女はぱちくりと驚き

「あう……………」

顔を赤くした

この『同等契約』は一般的にはプロポーズなどで使われる
なんたつて意味がパートナーになつて下さいだからな

少女が顔を赤くしたのも頷ける

かくいう自分も顔が赤いと自覚しているのだから

「貴方…クーフアスは私のパートナーになつてくれるのですか？」

「それも違う。俺はパートナーになつてあげるんじゃない。君にパートナーになつて欲しいんだ」

「……………あう」

少女はまた顔を赤く染めた

やばい！この子凄く可愛いんだけどっ！

「もう一度聞くよ？俺のパートナーになつてくれないか？」

「……………や、私はクーフアスのパートナーになります」

「…ありがとう」

俺は嬉しくて叫びたい衝動を必死に押し殺しながら少女に感謝の言

葉を述べた

俺が少女をパートナーにしたいと思ったのは下心からではない純粹にこの子を守りたい、側に居たい、もう二度と悲しませたくないそんな自己満足な自分の一方的な想いからである意味これは恋とも呼べるだろう

「それでは契約を…」

「ヤ…」

そして少年は少年と契りを交わす
この先どんな試練が待ち構えていても結んだ糸が決してほどけない
ようにと祈りながら

『契約』―結ぶ絆―（後書き）

次回からは遂に学園編！新キャラ続々登場しますよ！

あつ、でも設定とかは他の小説と被ると思いますが見放さないで下さいねー！

かわえ えええええ！

どもおひさー

皆のアイドル、クーファスです♪

…ごめんなさい

アイドルだなんて……フツメンの俺なんかおこがましいよね……

「ノ、クーはカッコいいです」

あら、ありがとうク口

でもさらつと心読んだよね？絶対心読んだよね？雰囲気でわかりま
すとか言われても僕信じないからね？

「はい、心読みました。一字一句の間違いなく駄々漏れです」

そこは否定してほしかったな！というかこれ便利だな！俺の思考駄々漏れは嫌だけどこれすごく便利！

「はい、クーと心から繋がれて私はとても嬉しいです」

ハアハア、かーいーよお！お持ち帰りい！…すいません

アルテミス学園前にクーファスとクロー【鴉の翼】はいたクーファスとクローがなぜこんなに楽しそうに会話しているのかというのは少し前に遡る

「我望むは対等な証、我望むは契りを結びし者の幸福なり」

『忘却の図書館』に暖かな光とともに契約の詩が紡がれる

「血と血を交え繋がりを持ち同等の関係をここに結ぶ」

「ヤ、契約に応え契りを結ぶ事に同意します」

「では血を…」

二人は親指を歯で噛み血を出す

そして血が溢れ出る親指を重ねる

刹那、淡い光が放たれた

「契約は成された。我、クーファス・ツヴァルトこの命続く限り隣にいることを誓う」

「ヤ、同じく【鴉の翼】誓いに応えます」

淡い光は二人を包み静かに消えた

光が収まったクーファスの首には先ほどまで無かった黒のチョコレートが【鴉の翼】の人差し指には白のリングがはめられていた

「んー、これが契約の証ってやつか」

クーファスは見ることの出来ないチョコレートを指でなぞった

「……………」

「ん、どうした?」

「…なんでクーファスはリングじゃないんですか?」
「…はい?」

「普通パートナーになるんだったらリングというのが相場だと思います」

(ああ、乙女チックで可愛い事言っなあ…)

「…!?か、可愛いとか今言つの反則です…」

「あ、ごめ…もしかして声に出てた?」

「……ヤ」

(やっちゃまった…キモいな俺…でも照れてる顔も可愛いなあ…)

「じゃ、じゃあこれからアルテミス学園ってところに行くよ………」

「?どうしんですか?クーファス」

「そーいや名前は?」

「……私の名前は魔導書にされた時から【鴉の翼】です」

「……ん、ならお前は今日からクロだ」

「ク…口?」

「そ、クロだ。ほら俺って髪が白いだろ？それに対するようにお前の髪は黒い。二人で一つの白と黒って意味でクロ。」

「クロ…私の名前…クーファスと二人で一つ…嬉しいです」

「気に入ってくれて良かったよ」

「あの…クーファスの事をクーと呼んでいいですか？」

「ん、いいよ」

「ありがとうござ…」

フラッ

「っ！クロ大丈夫かつ！」

「ヤ、大丈夫です。少し疲れただけですから」

「そつか…良かった。なら早く休んだほうがいいな今からアルテミス学園って所に行くからそこで休もう。立てるか？」

「すいません。ちょっと無理です…」

「ん、気にすんな。立ててもおぶっていくつもりだったしな」

「あつ、おぶっていきなりいい方法があります」

「ん？何…わっ！？」

突然クロの体が光出したかと思えばクロの姿が消え代わりに…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4476x/>

不完全なヴァンパイアと魔導書の少女

2011年10月26日06時36分発行